

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
安形のりよ	女 性	1 6 歳	新城市富岡 (新城市山吉田)

「満州へ行った隣家の春三さん」

私の実家は、旧鳳来町山吉田の小阿寺という山に囲まれた谷あいの小さな集落にあります。南に山を背負っている傾斜地に5軒の家がありました。そんな私の家の裏に、小さな平屋の家がありました。鈴木さわさんというおばさんが一人息子の春三さんと二人で住んでいました。昭和15年頃のことです。春三さんが満州へ行くことになりました。年齢は大体30歳ぐらいだったと思います。どんないきさつがあったか分かりませんが、当時の春三さんの家は貧しく、わずかな畑があるばかりで水田もなかったので、小作として生計を立てていたと思います。春三さんは独身でしたので、思い切って国策に協力することで、ひと旗あげたいと思ったのかもしれませんが。役場の人たちから強く勧められたのかもしれませんが。母親を残して一人で補充先遣隊として満蒙開拓団に加わり、満州へ渡っていきました。満州での春三さんのことは分かりませんが、母親を呼び寄せることもなかったもので、さわさんは一人暮らしになりました。

残されたさわさんの家へ、私の母親（ひさみ）に頼まれて、野菜や食べものを時々届けに行きました。父母は、さわさんが一人暮らしで困ることが多いし、さみしいだろうからと気を遣っていたようです。

終戦後しばらくしてから春三さんは満州から戻りましたが、昭和23年になってから、さわさんを連れて段戸山の方へ行くことになり、私の家へあいさつにみえました。私の父（太八）が、さわさんの家を買取ることになりました。春三さんの家の前にお地蔵さんがあり、私は当時、隣に住んでいた同級生の肥田いくよさんといっしょにお地蔵さんをお参りに行ったり、春三さんの家へ遊びに行ったりしました。でも、満州の話は聞くことはありませんでした。終戦後になってから帰国できるまで、大変な目にあったことは聞いていたので、ふれないようにしていたと思います。私の親も満州のことは聞かなかったと思います。

春三さんは裏谷で結婚されたと聞きましたが、詳しいことは分かりません。その後、春三さんが住んでいた家は取り壊され、今は何も残っていません。



切り開かれた裏谷の幹線道路と耕地 2024年

<付 記>

鈴木春三さんは、昭和23年(1948)に段戸山裏谷へ東三河郷開拓団帰還家庭27戸の一員として、再び集団入植することになった。山林を切り開き、家を建て、田畑を拓き、道を整備していったが、厳しい自然条件と地理的要因のため、次第に土地を離れる人が多くなった。昭和51年6月、滝川辰雄氏が行った調査では残った帰還家庭はわずか3戸で、そのうちの1軒が鈴木春三宅で、妻と4人の娘の名前が記載されている。生涯にわたって苦勞をされた春三さん、静かな自然に囲まれた裏谷で生涯を終えられたことは確かである。

終戦の日のこと

私の父はとても律儀で責任感が強く、村の役をいろいろやった人で、当時は出征した家の手伝いを手配したりしていました。家にはラジオがあり、終戦の日は父が家族みんなをラジオがある部屋に集めました。弟二人、妹一人、母の6人です。

「天皇陛下のお言葉があるから、かしこまれ！頭を下げよ！」

と言いました。放送が終わると、

「やい、負けただよ。」

とひと言だけ言いました。それっきりでした。政治に強い関心があった父には、大きな衝撃となる放送だったようです。私にはお言葉の内容がよく聞き取れませんでした。父は意味が分かったようです。しばらくの間、何も話しませんでした。豊川海軍工廠の爆撃があった数日前、B29が大編隊で飛んでいくのを見たので、日本が勝っているとは思えなかったのですが、それでも負けるとは思っていませんでしたので私もショックでした。

戦時色一色 ～勤勞奉仕と兵隊送り～

青年学校の頃、雨の日は授業がありましたが、晴れた日は勤勞奉仕ばかりでした。竹ノ輪や下吉田などの出征した者の家に、田畑の手伝いや草取りに出かけました。また、山へ薪を取りに背負子をかついで行ったり、運動場を開墾してサツマイモを栽培したりしました。

兵隊送りは、小学校から全校児童がみんなで隊列を組み、日の丸の小旗を振り、軍歌を歌いながら歩きました。「露營の歌」「愛馬行進曲」「出征兵士を送る歌」などを歌いました。低学年は途中までで、高学年は村境の六地藏まで行きました。そこで出征兵士があいさつをされ、万歳三唱で送られました。家族は本長篠まで送って行きました。大勢の人を見送りましたが、近所では、すぐ隣の同級生の兄さんと小阿寺の人を見送った覚えがあります。幸い、二人とも帰還されました。近くで戦死した人は、大田輪に一人いたと思います。

令和6年9月15日聞き取り

八名郷土史会 安形 茂樹